
幼なじみはお嬢様

和藤渚

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幼なじみはお嬢様

【Nコード】

N6824D

【作者名】

和藤渚

【あらすじ】

病弱な主人公にあれやこれやと世話をするお話

「ゴホツゴホツゴホツ……」

今、僕の状態は震えるほど寒く、何も考えられないほど頭が痛い。

そして咳が止まらず、鼻水も止まらない。熱は38.2度。

そう風邪を引いているのだ。

いまは桜も散り葉が着き始めるちょうどいい季節だつていうのに風邪を引いている。

まあ昔から病弱だった僕にとっては日常茶飯事。

ゴゴゴゴゴ……

と近所迷惑のレベルをはるかに超えている轟音が鳴り響く。

間違いない！！！！ あの人だ！！！！

「釜田英太郎？もってきましたわ。」

と最低でも1台2000万はする自家用ヘリで颯爽と現れた金髪で腰まである綺麗な長い髪に、外国人のようなはつきりとした目鼻立ち、透き通ったな碧い瞳、まるでフランス人形をそのまま人間にしたような美女。

この人は誰もが恐れる美川財閥の娘であり次期後継者でもある、美川^{かわあゆみ}亜由美僕の幼なじみである。

「普通に入ってこれないのか？いつもいつも……ゴホツ」

「私^{わたし}が来たからにはもう大丈夫！！」

と自信満々にいう亜由美。

大丈夫なわけねーだろう！！！！

風邪を引くたびにこの調子で薬を届けにくる。

たくっ！　いつになつたらちゃんと玄関から自家用ヘリを使わずに入ってきてくれるのだろうか？それともそれは、一生かなわない夢なのか……

普通なら近所から苦情がたくさん来てもおかしくないのだがなに

る誰もが恐れる美川財閥である。
何をされるかわからない。

何人かは屈することなく苦情を言ったのだが、その人たちはみんな
いつの間にか姿が無くなる。そうそうこの間引越して何も知らずに
苦情をいった勇氣ある人の家もさら地になっていた

ご愁傷様です……

そしてホントにごめんなさい……

近所のみなさんも毎回すいません本当に
と心の中で謝るなか、

「これは抗生物質で一日3回食後に飲むこと。副作用で眠くなるか
ら気をつけて。後これは……」

と何事もなかったように薬の説明しだす。

風邪を引くたびに思う。そんな薬より胃薬が欲しいと

あれ？ 気にしてなかったけどなんでいつも僕が風邪引いているこ
とがわかるんだろう？

それにどこから薬を調達してるんだろう？ そもそもなんで僕にそ
んなことをするのかわからない

と考えるといろいろと黒い部分がみえてきそうなのでやめようこれ
以上は

「では私わたくしはこれで。お迎えは？」

「いいわ。明日、英太郎と一緒に登校するから」

おい！！ 泊まっていく気かよ！！！！

「左様でございますか。では英太郎様くれぐれもお嬢様をよろしく
お願いします」

とS・Pの人であろう黒ずくめの人がそう言って自家用ヘリとともに
に去っていった。

美川財閥は100年以上の歴史がある由緒正しいお家。

そのためいろいろと英才教育施されている。

亜由美も例外ではないそのためか成績は常にトップ何にでも手本に
される存在。

次期後継者だからと生徒会長になるつもりだという。
お願いだから独裁になるのだけは止めてもらいたい。
薬の説明が終わると

「もうお昼食べました？」

「いや、まだだけど」

「この私が作ってあげますことよ？」

「遠慮しとくよ……」

「遠慮する必要がどこにありますの？」

彼女はたしかに何でもできるが料理だけは苦手だ。

本人は気づいていない様子。いや気付いてるけど認めたくないのだらう。

遠慮じゃなくて拒否してんの！！ 拒否！！ わかってます？

という心の叫びを尻目に彼女はケータイを取り出しどこかに電話し始めた

「松坂牛と……産のワイン1973年モノで。あと……」

と次々と手に入れるのが非常に困難と思われる高級食材を伝えていく。

まあこの人の財力と権力なら簡単に入手出来るんだらうけど……

数十秒後

「わかった」

と掛かって来た電話を切った。

「では作ってきますわ」

と一階に降りていった

は……これでやる仕事の一つ増える

僕は頭を抱えた。

「きゃー」

「私の言^{わたくし}うこと聞きなさい！！！！」

「わー」

と不安な叫び声が聞こえてくる。

はあ後で自分で作るかとうなだれた。

なんだかんだで完成した得体の知れない料理、いや料理というべきなのかとにかく異臭漂う変な色をしたモノが入った皿たちが並んだ。「これは伊勢えびのリゾット、これは松坂牛のたたき、これは……」と料理の説明をするが言われてもわからない

第一まだ熱があるので食欲がない

「ゴメン食欲がないんだ」

「それは大変!!!! 早く食べないと!!!! さあどうぞ」

と説明をやめ勧める亜由美だがどうも食べる気が起こらない。

熱があるからでもあるが、一ヶ月空腹で死にそうな人でも一目で食欲が失せるような料理である。

選択権のない僕はどっちにしても死ぬことは確定してるわけで……
そして僕は腹をくくった。

「いただきます」

引き攣った笑顔で口に運ぶ。

「ゴホゴホゴホッ……」

初めて体験したこの地球上に存在しないような味。

こんなの食べ物じゃないよ……

と内心思いながら

「おいしいよ」

とまた引き攣った笑顔で感想をいうと

少し顔が赤くなり

「当然ですわ。この私が作^{わたくし}ったんですから」

と自慢する。

あれ？　なんで赤くなってるんだろう？　風邪引いたのかな？

としばらく考えてみる。

「ちよつと来て？」

「なんですの？」

と亜由美は近づく。

そして両手で彼女の頭ををそつと自分の額にもってくる

「熱はないようだけど……」

すると彼女の顔はますます赤くなりつつさに離れた。

「何をするんですの！！？」

とひっぱたかれた

え……？　なんで……？

そんな時ピンポンと救いのチャイムがなった

「はい」

と喜び勇んで階段を降りた

玄関には友人の加藤と杉田がいた。

「おゝやってるね」

「今日も来てるのか？」

「なんでわかんのか？」

「この地球上にないような臭い、お前の今にも死にそうな顔見ればわかるよ」

「とりあえず上がってよ」

と二人を家に招き、自分の部屋に入れ、トイレに行った。

「ういゝつす」

「来たよ」

「あら？　来ましたの？」

少し不機嫌そうな亜由美。

加藤は料理を見て味見を試みる。

「おゝこれはヒドイね。道理で英太郎くんが死にそうな顔なわけだ」と冷静に批評する。

「でも英太郎はおいしいって言うてくれましたわ」

「あいつならそういうさ」

「まあ優しいからね。英太郎君は」

と二人は言った。

「もしかして今の料理で英太郎に完全に嫌われたってことですか？」
「風邪引くたび毎回強引に食べさせればね」

「そんな……」

「大丈夫。まだ起死回生できるから」

ソノコ口僕はというと

グルグルグル……

この腹痛と格闘中。

お父さん、お母さん先立つ不幸をお許してください……と書きたくなるくらいの痛み。そして

今日はしつこいな……

いつもいつもやってくれるじゃん

いつもやることは金と権力使ってハチャメチャでも憎めない不思議な人。

それにしてもなんでいつもここまでしてくれるんだろう？

こうやってトイレで悩むのも恒例になっている。

しかし答えが出たことは無い。

おなかの調子はなんとかよくなったので部屋に戻った。

入るなりすごい重い空気。

なんだよ……この空気……

「ど……どうしたの？」

「いやちよつとな」

「そうそうお前台所借りるぞ」

「別にいいけど。なにをするの？」

「それは秘密だ。美川さんもきて？」

そういつて僕を残しみんな台所に向かった。

なにするんだろう？

「うわ〜」

「どうやってたらこうなるんだ？逆にすごいよ」

台所の惨状に驚きながらも使えるまでに片付いた。

「さあゝやるか」

「何をするんですの？」

「言つたろう？起死回生できるって」

「またつくろうよ？俺たちが手伝うから」

「このままじゃイヤでしょ？」

「あなたたち……」

「持つべきものは友つてね」

そして料理を開始した。

「たくつ驚いたよ。まさか一国を動かせる大財閥の娘が

病弱で内気な英太郎が好きだとは」

「そんなんじゃないくてよ！！」

と必死に否定する亜由美。

「顔、赤くなつてるぞ。塩とつて」

「素直になろうよ」

そうあのときから私は……

私はその時お稽古事が苦痛で仕方なかった。とても厳しくある日ついに逃げ出した。

初めての公園で

「こんなもので庶民は遊んでますの？ 貧乏くさいですね」といろいろ回っている

「うわー！！ 髪が金色だぞ？」

「妖怪だー！！」

「何が妖怪ですの？ れっきとした人間ですわ！」

「妖怪がしゃべったゝ怖いよゝ怖いよゝ」

「来るな妖怪金髪女」

と一人の悪がきが突き倒した。

「うわゝ妖怪に触ってしまった！！ 手が……」
と逃げていく悪がきたち。

私はうずくまっていた。

しばらくすると

「大丈夫？ どこか痛いのか？」

と一人の男の子が声をかけてきた。

「いいえ。違いますわ」

「なんで泣いてるのか？」

「なんでもないですわ」

「痛いの、痛いの飛んでいけ、痛いの痛いの飛んでいけ」

と頭をなでる男の子。

「もうなにをするんです！！？」 私わたくしに関わらないでください！！！」

と彼を見上げると私ににっこりと笑ってこう言ってくれた

「お友だちになろう？」

そして私はまたうつむいた。

とても嬉しかった。

大財閥の娘だからとたくさん厳しいお稽古ごとをし、接する人たちも大人の人以上。たまに同い年の人と接すると思えば私の政略結婚のお見合いだし。外にできれば美川と名乗っただけで態度が変わったり逃げ出したりする。

「私を誰だと思ってますのか？」

「誰？」

「聞いて驚かないことね私わたくしは泣く子も黙るあの美川財閥の一人娘美川亜由美よ！！！」

「……………」

そついうと彼はキョトンとしていた。

（そうよね？ 美川って言えば誰でも驚くわ）

「……………みかん？ さんは？ それと友達と何の関係があるのか？」

「美川財閥です！！もういいです！友達にでも何にでもなっただけようではありませんか！！！」

「本当？」

「本当です」

「やったー!!」

無邪気にはしゃぐ男の子はとても眩しく見えた。

「英太郎？　行くわよ？」

と少年の母親らしき人が近づいてきた。

私は立ち上がった。

「お母さん？　僕ね、お友達が出来たんだ？」

「へーこの子がお友達になったの？」

「うん」

「お名前は？」

「美川亜由美」

と小さな声でぼそつと言った。

「聞こえないな〜お名前は？」

そして勇気を振り絞って

「美川亜由美」

今度は公園中に響き渡るくらい大きな声でいった

（名前を言ったとたん態度が変わるんだ。いつもそしてそのことを知るや否やこの子を気に入らせようとするんだ……この人もきっと）

「そう？　英太郎と仲良くしてあげてね？」

と優しく微笑み頭を撫でる。

意外な反応に私は戸惑いを隠せなかった。

何かとても心地いいものに包まれているそんな気がした

「お嬢様！！　こんなとこにいたんですか？　行きますよ」

と私は見つかり連れて行かれたのだ。

それからしばらく毎日のように公園に行くが彼の姿は現れず、ある日マスクをして辛そうに母親に連れられているのを見た。

それからであるそのたびにお見舞いに行くようになったのは

「美川さん？ 手が止まってるぞ」

「あ……アチアチ」

「しつかりしろよ？ 考えごとか？」

「まあそんなところですわ」

「ほとんど調理が進んでいく」

そして先程とは違う立派おかゆが出来た。

おかゆの入った鍋を持って行く。

階段からいい匂いが漂ってくる。それに釣られて食欲もでてきた。

「ほら出来たぜ」

と加藤がいつてみんな僕の部屋に入ってきた

杉田がふたを開けると

湯気がもくもくと立ち上がりその中には綺麗に輝く米が印象的だ。

「これ美川さんが作ったんだよ。英太郎くん」

「ほとんど二人に手伝ってもらったんだけど」

「ちゃんとたべてやれよ？」

という二人は部屋から出ていった。

「いただきます」

とお椀について一口食べてみる。

すげー！ さつきと全然違う、程よい塩あじに食べやすい食感。

あまりのうまさに僕は掻き込んだ。

ついに完食。

「おいしかったよ。ありがとう。亜由美」

「当たり前ですわ。この私^{わたくし}が作ったものですよ？」

本日二回目のこの言葉。

こっちの方がとても嬉しそうに聞こえる。

でも一つ疑問が残る。

「ねえなんでまた作り直したのかな？」

すると異様な雰囲気沈黙が流れた。

あれ？なんか僕変なこと言っちゃった？

「私……帰る……」

と彼女は部屋を去っていった。

「え？ 今日泊まるんじゃないの？」

「……もういいです」

と部屋から去っていった。

どうしたんだろう？

「はあ……」

「またダメだったか……」

「こればかりはどうにもならないもんね」

二人は亜由美を慰めるのであった。

私は美川亜由美。美川財閥の一人娘で次期頭首。今まで欲しいものは全て手に入れてきた。でも一つだけなかなか手に入らないものがある。

それは……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6824d/>

幼なじみはお嬢様

2010年10月9日04時08分発行